

児童の描画に対する評価の観点についての研究Ⅲ

— 図画工作科教育を専門としない学生による評価の分析 —

有原 穂波 埼玉大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修
萩生田 伸子 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座
小澤 基弘 埼玉大学教育学部美術教育講座

キーワード：児童、描画、SD法、評価、因子分析、回帰分析

1. 概要

筆者は、これまでに図工・美術教育を専門とする学生（以下では「美術専修の学生」とする）と教員を対象としてSD法を用いた絵画の印象調査を実施し、量的な観点から検討を行ってきた。「児童の描画に対する評価の観点についての研究Ⅰ」では美術専修の学生の回答結果について分析を行い、それをもとに「児童の描画に対する評価の観点Ⅱ」では教員の回答についての分析と美術専修の学生との回答結果についての比較を試みた。その結果、美術を専門する教師と美術を専門としない教師の間にはあまり差が見られず、教員は教科による専門的な見方よりも教員としての教育的な配慮を踏まえた見方を優先させていることが推測された。ここから、教員を1つの群としてみなし、更に教員と美術専修の学生と比較を行ったところ、大きく評価が異なる絵があることがわかった。特に、教員は安定感のある絵を評価する傾向にあり、独創的な表現をしている絵については美術専修の学生の方がポジティブな評価をしていることがわかった。

本稿では、これらに引き続いて行った図工教育を専門としない学生（以下では「他専修の学生」とする）を対象とした同様の調査について分析を行い、大学での専攻による評価の仕方の違いや学生・教員間にみられる差異について更に検討を進めていく。これにより、教育現場において必要とされる評価の観点（学生が身につけるべき観点）や、専攻による評価の観点（美的な質を見る力）の差異を明らかとしたい。

2. データについて

2-1 絵の選定

これまでの調査に倣い、平成24年度に大久保小学校・在家小学校の朝活動において描かれた、「大きな木」をテーマした絵画30枚を本調査でも用いた。調査に用いた絵は各クラス1枚を基準としており、大久保小学校では1学年あたり3枚、在家小学校では1学年あたり2枚を選定している。

2-2 質問項目の選定

絵の選定の場合と同様にこれまでに行ってきた調査に倣って、印象やイメージの測定を目的としてSD (Semantic Differential) 法を調査方法として採用した。

質問項目は表1に示した23項目である。調査項目の見直しを行うため、まず美術専修の学生を



図1 絵の一覧

(絵画番号：左から一段目 1～6、二段目 7～12、三段目 13～18、四段目 19～24、五段目 25～30)

表1 選定した項目

今までの調査から選定した項目					
軽快な	—	重厚な	曖昧な	—	明解な
明るい	—	暗い	偶発的な	—	意図的な
活気のある	—	活気のない	落ち着きのない	—	落ち着きのある
わかりやすい	—	わかりづらい	安心な	—	不安な
力強い	—	弱々しい	開放的な	—	閉鎖的な
鮮やかな	—	地味な	変化のある	—	単調な
柔らかい	—	硬い	鈍い	—	鋭い
感情的な	—	理性的な	面白い	—	退屈な
動的な	—	静的な	好きな	—	嫌いな
暖かい	—	冷たい	良い	—	悪い
新たに追加した項目					
ユニークな	—	ありきたりな	独創的な	—	平凡な
個性的な	—	一般的な			

たいへん	どちらかと	どちらか	どちらか	どちらか	たいへん
軽快な	-----	-----	-----	-----	重厚な
明るい	-----	-----	-----	-----	暗い
活気のある	-----	-----	-----	-----	活気のない
分かりやすい	-----	-----	-----	-----	分かりづらい
単調な	-----	-----	-----	-----	変化のある
鋭い	-----	-----	-----	-----	鈍い
理性的な	-----	-----	-----	-----	感情的な
動的な	-----	-----	-----	-----	静的な
安心な	-----	-----	-----	-----	不安な
暖かい	-----	-----	-----	-----	冷たい
硬い	-----	-----	-----	-----	柔らかい
曖昧な	-----	-----	-----	-----	明快な
意図的な	-----	-----	-----	-----	偶発的な
落ち着きのある	-----	-----	-----	-----	落ち着きのない
独創的な	-----	-----	-----	-----	平凡な
力強い	-----	-----	-----	-----	弱々しい
ユニークな	-----	-----	-----	-----	ありきたりな
鮮やかな	-----	-----	-----	-----	地味な
開放的な	-----	-----	-----	-----	閉鎖的な
一般的な	-----	-----	-----	-----	個性的な
面白い	-----	-----	-----	-----	退屈な
好きな	-----	-----	-----	-----	嫌いな
良い	-----	-----	-----	-----	悪い

図2 回答用紙の質問項目

対象とした調査と同様の20項目を採用した。更に、教員を対象とした調査の結果から「その表現が一般的かどうか」に関する観点が初学者と熟達者の差に大きく関わっている可能性が示唆されたことから、長、原口(2013、2014)によるSD法を用いた絵画評価に関する各研究結果を総合した絵画印象の形容詞尺度の構成を参考に、今回の調査項目には「ユニークな-ありきたりな」「独創的な-平凡な」「個性的な-一般的な」を加えている。また、回答には5件法を用いており、得点は左から順に1～5点とした。

表2 回答者の性別、学年の内訳

	学年			合計	
	1	2以上	不明		
性別	男	19	2	—	21
	女	18	7	—	25
	不明	—	—	2	2
合計	37	9	2	48	

2-3 調査方法

(1) 調査の実施

平成25年7月に、教育学部に所属する学生のうち、図画工作科教育を専攻していない学生48名を対象として実施した。学年・男女の内訳は表2の通りである。

(2) 回答方法

選定した絵を学校・学年が偏らないように並び替えたものを2枚ずつスクリーンに投射し、回答者がそれを見ながら回答用紙に書き込んでいく方式をとった。

回答用紙には1枚(A4サイズ)あたり図2に示した形式の質問項目を3組ずつ印刷したものを使用した。フェイスシートを含め11枚綴りになっている。また、質問項目は、はじめに総合評価をする項目と予想される「面白い」「好きな」「良い」を省いた19項目を因子にかかわらず並び替えたものを配置し最後に残りの3項目を配置している。

(3) 倫理的配慮

回答者には、研究の趣旨、本調査が個人の能力を特定することを目的としたものではないこと、調査結果は研究の目的でのみ使用し、成績には反映されないことをフェイスシートと口頭で説明し、協力を得た。

3. 結果と考察

3-1 13項目を対象とした分析

(1) 全項目についての分析

調査に用いた23項目の平均と標準偏差は表3の通りである。得点の平均をみると、全体として「明るい」「偶発的な」と回答される傾向にあり、明るく、自由な印象の絵が多かったことがうかがえる。また、「鈍い」「面白い」「好きな」「良い」の標準偏差は低くなっており、特に「好きな」「良い」の標準偏差は小さい。どちらも美術専修の学生・教員を対象とした場合にも同様の傾向がみられた項目である。今回の調査の回答者には様々な専修の学生が混在しているため、標準偏差は今までよりも大きくなると予想したが、1つの専修を対象とした場合と比較しても大きな違いはみられなかった。

(2) 因子分析

次に、これまでに行った調査と同様に各項目について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。結果は表4の通りである。解釈の都合上、「鈍い」「曖昧な」は除外した。

第一因子は「明るい」「活気のある」「暖かい」等の9項目で構成されていた。項目等から、前回までの調査結果に倣って「朗らかさ」と命名した。

第二因子は「好きな」「良い」「面白い」の3項目で構成されており、これらは総合評価をすするものとして配置した3項目と一致している。そのため、因子の名前も「総合評価」とした。

第三因子は「偶発的な」「落ち着きのない」「感情的な」「変化のある」の4項目で構成されて

表3 各項目の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
軽快な	2.615	1.117
明るい	2.606	1.155
活気のある	2.767	1.149
わかりやすい	2.616	1.162
変化のある	3.215	1.162
鈍い	3.111	0.901
感情的な	2.929	1.071
動的な	2.982	1.111
安心な	2.888	1.042
暖かい	2.832	1.078
柔らかい	3.048	1.057
曖昧な	3.140	1.078
偶発的な	3.277	1.068
落ち着きのない	3.177	1.003
力強い	2.795	1.050
鮮やかな	2.817	1.186
開放的な	2.710	1.022
面白い	2.698	0.904
好きな	2.653	0.831
良い	2.615	0.830
ユニークな	2.616	1.089
独創的な	2.677	1.101
個性的な	2.940	1.076

表4 各項目の因子負荷量(21項目)－他専修学生

項目	因子				
	I	II	III	IV	V
第一因子 朗らかさ					
明るい	.852	-.057	-.001	.014	-.226
活気のある	.825	-.080	.054	.079	.040
暖かい	.765	-.012	-.004	-.075	.006
鮮やかな	.749	.048	.077	.035	.051
開放的な	.678	.124	.095	.016	.038
安心な	.620	.004	-.194	-.120	.069
軽快な	.559	-.023	-.145	.114	-.476
動的な	.553	-.033	.155	.126	.194
わかりやすい	.432	.061	-.275	-.217	.092
第二因子 総合評価					
好きな	-.026	.918	.021	-.032	-.024
良い	-.027	.863	-.021	-.004	-.030
面白い	.072	.630	.023	.236	.012
第三因子 乱雑さ					
偶発的な	-.042	.094	.725	-.179	-.051
落ち着きのな	.062	-.026	.643	-.069	.012
感情的な	.120	-.009	.557	-.004	.003
変化のある	.070	-.056	.365	.293	.043
第四因子 オリジナリティ					
独創的な	-.003	.075	-.110	.816	.036
ユニークな	.085	.070	-.078	.811	.059
個性的な	-.206	-.085	.240	.475	-.106
第五因子 力強さ					
力強い	.318	-.021	.031	.070	.605
柔らかい	.317	.057	.250	-.090	-.345
因子間相関					
II	474				
III	-.235	-.196			
IV	.064	.335	.436		
V	.072	.296	-.058	.142	

いた。この因子は絵から読み取れる主観的な感情の動きを表しているとして解釈し、これまでに倣って「乱雑さ」と命名した。

第四因子は「独創的な」「ユニークな」「個性的な」の3項目で構成されていた。これらは今回新しく追加した3項目である。絵のオリジナリティの高さを表していると考え、因子の名前は「オリジナリティ」とした。

第五因子は「力強い」「柔らかい」で構成されている。ただし、「柔らかい」の係数は負になっているため、実際には「柔らかくない＝硬い」と「力強い」のまとまりである。よって、第五因子は絵の筆致や色使い、モチーフ等の力強さを表しているとして解釈し、因子の名前も「力強さ」とした。

また、美術専修の学生や教員を対象とした調査の結果と比較するため、それぞれの調査の中で共通して使用し

表5 各項目の因子負荷量(13項目)－他専修学生

項目	因子		
	I	II	III
第一因子 朗らかさ			
明るい	.918	-.061	.064
活気のある	.762	.066	.082
軽快な	.654	-.096	-.002
開放的な	.595	.219	.101
安心な	.512	.052	-.277
柔らかい	.376	-.076	.231
第二因子 総合評価			
好きな	-.049	.901	.013
良い	-.037	.864	.021
力強い	.114	.274	-.038
鈍い	-.004	-.186	.098
第三因子 乱雑さ			
感情的な	.140	.011	.585
落ち着きのない	.067	-.029	.561
わかりやすい	.373	.047	-.376
因子間相関 II	.428		
III	-.300	-.254	

表6 各項目の因子負荷量(13項目)－美術専修学生

項目	因子		
	I	II	III
第一因子 朗らかさ			
明るい	.858	-.088	.068
活気のある	.687	.149	.287
安心な	.675	-.060	-.193
開放的な	.480	.292	.053
軽快な	.477	-.354	-.152
柔らかい	.331	.174	-.086
第二因子 総合評価			
良い	-.007	.897	-.089
好きな	.004	.808	-.119
力強い	-.025	.427	.368
鈍い	-.016	-.360	-.069
第三因子 乱雑さ			
落ち着きのない	.027	-.050	.732
感情的な	.018	.018	.583
わかりやすい	.281	.208	-.390
因子間相関 II	.336		
III	-.155	.087	

表7 各項目の因子負荷量(13項目)－教員

項目	因子			
	I	II	III	IV
第一因子 開放感				
活気のある	.847	.049	-.073	.300
開放的な	.802	.060	.022	.126
感情的な	.760	-.485	.048	-.039
軽快な	.625	.011	.037	-.434
柔らかい	.563	.068	.171	-.243
第二因子 安定感				
安心な	.090	.857	.015	-.025
わかりやすい	-.137	.677	.035	.095
明るい	.466	.581	-.101	-.085
落ち着きのない	.292	-.503	-.143	-.060
第三因子 総合評価				
好きな	.119	.100	.728	.073
良い	.036	.181	.689	.089
第四因子 力感				
力強い	.204	.050	.082	.586
鈍い	.178	-.075	-.060	-.262
因子間相関 II	.578			
III	.539	.635		
IV	.012	.208	.230	

た項目を用いて因子分析を行ったところ、結果は表5のようになった。美術専修の学生の場合(表6参照)と因子の構成が一致していたため、因子名もそれに倣って命名した。因子負荷量もほぼ同様である。教員を対象とした場合(表7参照)と比較すると、教員の場合には「朗らかさ」に相当する「開放感」、「乱雑さ」に相当する「安定感」、「総合評価」に加え、「力強い」「鈍い」によって構成されている力強さに関する因子(第四因子「力感」)ができています。「力感」に含まれている2項目は、学生の場合はいずれも第二因子に含まれており、項目を絞った際には教員の場合に限って独立した因子となった。図工の授業では「画面いっぱい描きましょう」「力強く、大きく描きましょう」といった指導は往々にして行われる。よって、「力強さ」が実際の教育現場で

は求められる観点であり、教員は学生よりも「力強さ」に関わる内容に特化した観点を持つ可能性が示唆された。

(3) 回帰分析

続いて、総合的な評価に影響を与えている項目を探るため、第2因子「総合評価」に含まれる項目のうち「好きな」「良い」について、それぞれを従属変数として回帰分析を試みた。

・「好きな」を従属変数とした分析

まず、「好きな」を従属変数、「良い」を除外した残りの21項目を説明変数として重回帰分析を行った（表8参照）。

5%水準で有意であったのは「わかりやすい」「感情的な」「面白い」「ユニークな」「独創的な」「個性的な」の6項目であった。特に因子分析において「好きな」「良い」と共に同じ因子にまとまった「面白い」は特に偏回帰係数の絶対値が大きく、「好きな」についての判断には絵の面白さが大きく影響しているようである。また、今回新たに追加した「ユニークな」「独創的な」「個性的な」はいずれも有意であり、絵の好き嫌いの判断には絵のオリジナリティの度合いが関わっている可能性が示唆された。また、「感情

表10 「好きな」を従属変数とした回帰分析(11項目)の結果—美術専修学生

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	-0.114	-1.978	.049 *
明るい	-0.017	-0.244	.808
活気のある	0.082	1.247	.213
わかりやすい	0.158	2.855	.005 **
鈍い	-0.284	-5.469	.000 ***
感情的な	-0.081	-1.463	.144
安心な	-0.100	-1.562	.119
柔らかい	0.243	4.548	.000 ***
落ち着きのない	-0.026	-0.455	.650
力強い	0.137	2.303	.022 *
開放的な	0.218	3.663	.000 ***

表8 「好きな」を従属変数とした回帰分析(21項目)の結果—他専修学生

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	-0.023	-0.907	.365
明るい	-0.012	-0.381	.703
活気のある	0.004	0.120	.904
わかりやすい	0.055	2.127	.034 *
変化のある	-0.025	-1.090	.276
鈍い	-0.027	-1.267	.205
感情的な	-0.084	-3.770	.000 ***
動的な	-0.003	-0.125	.900
安心な	0.028	0.987	.324
暖かい	0.046	1.524	.128
柔らかい	0.000	0.006	.995
曖昧な	0.001	0.053	.957
偶発的な	0.008	0.360	.719
落ち着きのない	-0.019	-0.832	.406
力強い	0.029	1.223	.222
鮮やかな	0.053	1.817	.069
開放的な	0.034	1.207	.228
面白い	0.540	22.110	.000 ***
ユニークな	0.072	2.460	.014 *
独創的な	0.057	2.021	.043 *
個性的な	-0.071	-2.857	.004 **

表9 「好きな」を従属変数とした回帰分析(11項目)の結果—他専修学生

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	-0.001	-0.045	.964
明るい	-0.014	-0.350	.726
活気のある	0.068	1.951	.051
わかりやすい	0.031	1.080	.280
鈍い	-0.134	-5.413	.000 ***
感情的な	-0.043	-1.644	.100
安心な	0.054	1.755	.079
柔らかい	-0.006	-0.222	.824
落ち着きのない	-0.064	-2.452	.014 **
力強い	0.142	5.154	.000 ***
開放的な	0.250	8.044	.000 ***

表11 「好きな」を従属変数とした回帰分析(11項目)の結果—教員

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	0.011	0.344	.731
明るい	0.005	0.119	.905
活気のある	0.080	1.945	.052
わかりやすい	0.028	0.911	.363
鈍い	-0.062	-2.470	.014 *
感情的な	0.015	0.526	.599
安心な	0.324	7.677	.000 ***
柔らかい	0.136	4.080	.000 ***
落ち着きのない	-0.086	-3.148	.002 **
力強い	0.146	5.032	.000 ***
開放的な	0.142	3.365	.001 **

* 50%水準で有意

** 10%水準で有意

*** 01%水準で有意

的な」の偏回帰係数は負であるため、絵の「理性的な」印象も絵の好みに関する判断と関わっている可能性がある。これは「わかりやすい」が有意であることからもうかがえる。

次に、美術専修の学生・教員との比較を行うため、因子分析の場合と同様に使用する項目をこれまでの調査で共通して用いたものに絞って分析を行った。従属変数は「好きな」、説明変数は表9に示した11項目である。有意な項目は「鈍い」「落ち着いた」「力強い」「開放的な」の4項目であった。表10・11の結果と比較すると、美術専修の学生や教員の場合よりも有意な項目が少なくなっており、「好きな」に影響を与えている項目が少なくなっている。

・「良い」を従属変数とした分析

続いて、「良い」を従属変数、「好きな」を除外した残りの18項目を説明変数として重回帰分析を行った（表12参照）。

5%水準で有意であったのは「わかりやすい」「感情的な」「面白い」「ユニークな」「独創的な」「個性的な」の5項目であった。「好きな」を従属変数とした場合と項目が一致している。また、ここでも新たに追加した3項目は有意であり、「良い」を判断する場

表14 「良い」を従属変数とした回帰分析（11項目）の結果—美術専修学生

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	-0.156	-2.822	.005 **
明るい	-0.002	-0.032	.974
活気のある	0.144	2.296	.022 *
わかりやすい	0.207	3.914	.000 ***
鈍い	-0.209	-4.217	.000 ***
感情的な	-0.048	-0.899	.369
安心な	-0.175	-2.861	.005 *
柔らかな	0.188	3.679	.000 ***
落ち着いた	0.065	-1.185	.237 *
力強い	0.182	3.213	.001 ***
開放的な	0.275	4.853	.000 ***

表12 「良い」を従属変数とした回帰分析（21項目）の結果—他専修学生

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	-0.011	-0.409	.683
明るい	0.007	0.202	.840
活気のある	-0.023	-0.729	.466
わかりやすい	0.088	3.322	.001 ***
変化のある	-0.012	-0.483	.629
鈍い	-0.003	-0.157	.875
感情的な	-0.019	-0.841	.400
動的な	0.026	1.014	.311
安心な	0.051	1.768	.077
暖かい	-0.026	-0.830	.407
柔らかな	0.033	1.464	.144
曖昧な	-0.002	-0.080	.936
偶発的な	-0.039	-1.636	.102
落ち着いた	-0.012	-0.494	.621
力強い	0.021	0.858	.391
鮮やかな	0.008	0.256	.798
開放的な	0.030	1.035	.301
面白い	0.498	19.757	.000 ***
ユニークな	0.096	3.166	.002 **
独創的な	0.099	3.374	.001 **
個性的な	-0.150	-5.838	.000 ***

表13 「良い」を従属変数とした回帰分析（11項目）の結果—他専修学生

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	0.006	0.195	.846
明るい	-0.020	-0.503	.615
活気のある	0.046	1.292	.196
わかりやすい	0.069	2.388	.017 **
鈍い	-0.121	-4.819	.000 ***
感情的な	0.006	0.224	.823
安心な	0.058	1.865	.062
柔らかな	0.002	0.068	.946
落ち着いた	-0.074	-2.825	.005 **
力強い	0.127	4.556	.000 ***
開放的な	0.239	7.609	.000 ***

表15 「良い」を従属変数とした回帰分析（11項目）の結果—教員

項目	標準化係数		有意確率
	ベータ	t 値	
軽快な	0.017	0.513	.608
明るい	-0.027	-0.616	.538
活気のある	0.087	2.062	.039 *
わかりやすい	0.128	4.096	.000 ***
鈍い	-0.022	-0.868	.386
感情的な	0.009	0.030	.764
安心な	0.322	7.482	.000 ***
柔らかな	0.086	2.524	.012 *
落ち着いた	-0.097	-3.500	.000 ***
力強い	0.143	4.859	.000 ***
開放的な	0.112	2.609	.009 **

* 50%水準で有意

** 10%水準で有意

*** 01%水準で有意

合にも「好きな」を判断する場合と同様の項目を重視していることがうかがえる。

次に、「好きな」と同様に美術専修の学生・教員を対象とした場合と結果を比較するため、「良い」を従属変数として回帰分析を行った。結果は表13の通りである。有意な項目は「わかりやすい」「鈍い」「落ち着いたない」「力強い」「開放的な」の5項目であり、「わかりやすい」を除いて「好きな」を従属変数とした場合に有意であった項目と一致していた。これを表14・15に示した美術専修の学生、教員を対象とした場合と比較すると、やはり有意な項目の数が美術専修の学生・教員よりも少なくなっている。また、「わかりやすい」「力強い」「開放的な」の3項目はいずれの場合においても有意であり、絵の良し悪しの判断に影響を与える可能性があることが推測された。

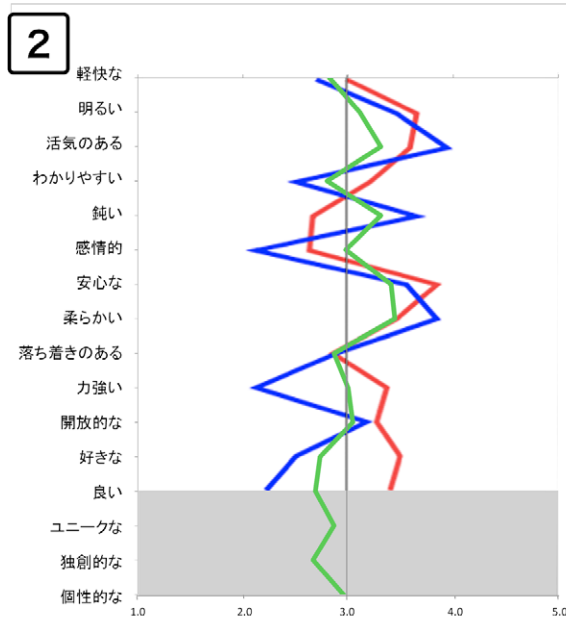


図3 絵画番号2のプロフィール



図4 絵画番号2

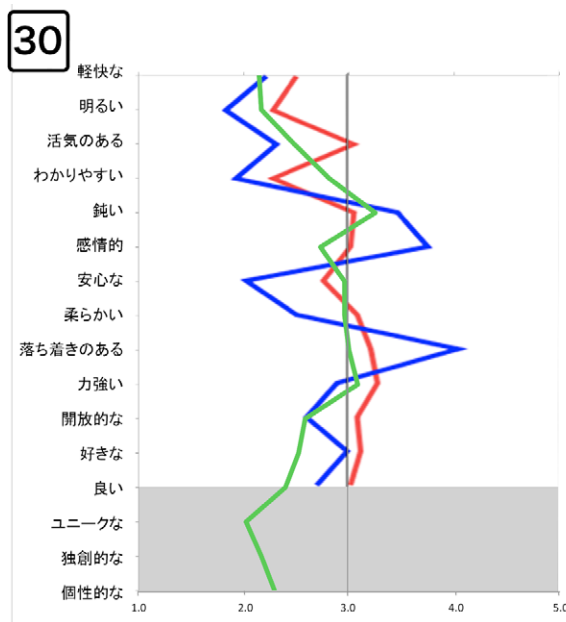


図5 絵画番号30のプロフィール



図6 絵画番号30

3-2 回答の平均値の比較

最後に、選定した30枚の絵に対する回答の平均値から各絵画のプロフィールを作成し、他専修の学生・美術専修の学生・教員の3群について比較を行った（付録参照）。絵画番号は図1に対応している。

他専修の学生の回答をみると、全体としては美術専修の学生と似た動きをする場合が多かった。また、絵画番号3、10のように美術専修の学生・教員・他専修の学生が共に似た評価をする場合もみられた。

総合評価（「好きな」「良い」）に着目すると、絵画番号2、11、14、25等については、それぞれの間程度にあたる評価がされていたことがわかった。他専修の学生は美術を専門に学んでいないため、絵画番号2のような特徴の少ない絵や絵画番号30のような奇抜な表現がされている絵に対しては評価をすることができず、「どちらともいえない」と答える傾向があると推測される（図

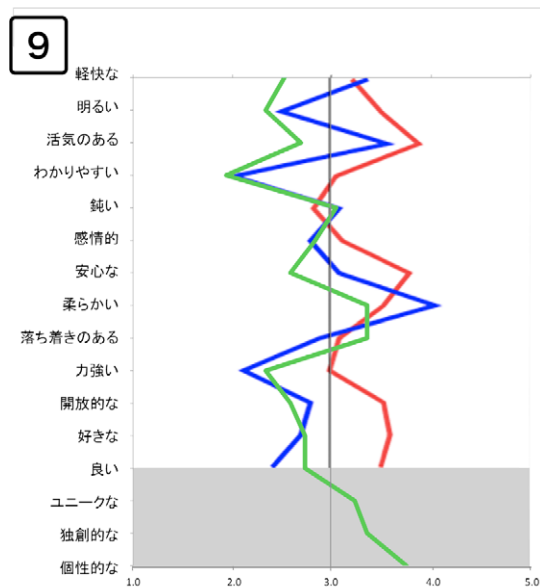


図7 絵画番号9のプロフィール



図8 絵画番号9

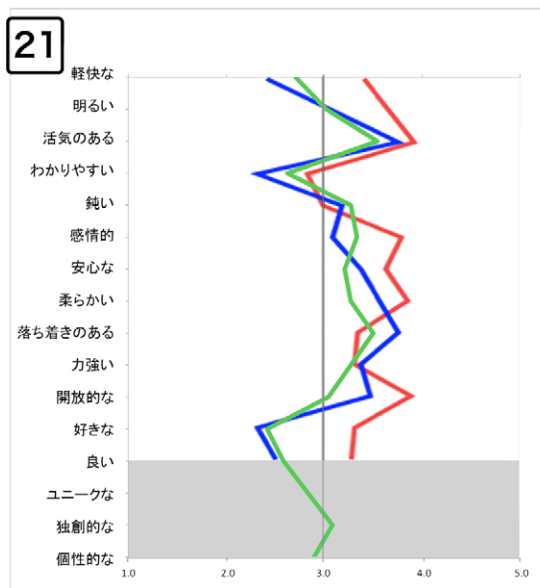


図9 絵画番号21のプロフィール

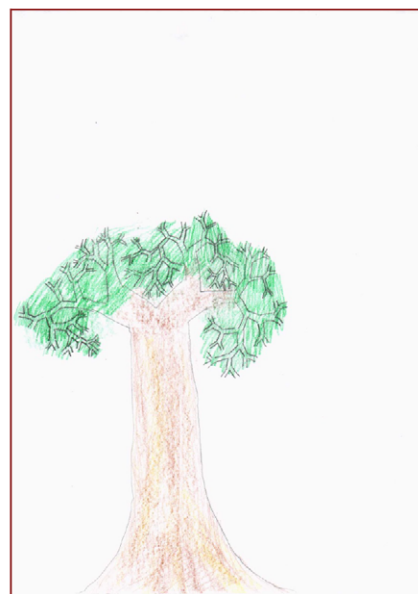


図10 絵画番号21

3～6参照)。

また、3群を比較すると、専攻に関わらず学生はどの絵に対しても好意的に評価しているのに対し、教員は「悪い」「嫌いな」と評価している絵画が多いことがわかった。教員は教育的な立場から評価をしており、絵画番号9・21をみるとわかるように、絵の面白さよりも丁寧に塗られているか、画面全体を堂々と使えているか等の点を優先しているためだと推測される(図7～10参照)。

さらに、「好きな」「良い」について高い評価を得た順に絵を並べ変えたところ、各群の評価に差がみられた(表16参照)。順位の構成をみると、他専修の学生の場合の上位の評定順は教員に

表16 絵画の順位

他専修の学生		美術専修の学生		教員			
順位	好	順位	良	順位	好	順位	良
1位	4	1位	4	1位	25	1位	1
2位	1	2位	1	2位	1	2位	25
3位	21	3位	25	3位	4	3位	4
4位	25	4位	30	4位	10	4位	10
5位	3	5位	3	5位	18	5位	18
6位	23	6位	23	6位	22	6位	3
7位	29	7位	15	7位	3	7位	22
	30	8位	29	8位	24	8位	5
9位	11	9位	17	9位	5	9位	23
	17	10位	22	10位	7	10位	24
	27	11位	21	11位	23	11位	14
12位	18		27	12位	15	12位	7
13位	22	13位	18	13位	6	13位	6
14位	15	14位	12	14位	14		8
15位	10	15位	10		30		11
	19	16位	11		11		15
17位	12	17位	14		12		29
	20		20		20	16位	12
	26	19位	2		29	19位	17
20位	2	20位	24		17		20
	9		28		8	21位	26
	14	22位	9		16	22位	21
23位	16		13		21		28
24位	13		19		26	24位	13
25位	28		26		28	25位	2
26位	24	26位	16		13		27
27位	8	27位	8		20	27位	19
28位	6	28位	6		26	28位	19
29位	5	29位	5		2	29位	9
30位	7	30位	7		9	30位	30

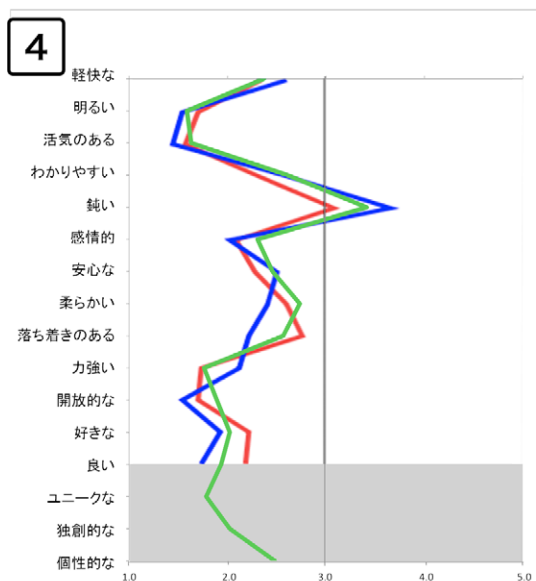


図11 絵画番号4のプロフィール



図12 絵画番号4

近いようである。ただし、絵画番号30のように教員と評価が食い違っているものもみられた。また、絵画番号4はどの群においても評価が高く、共通して好まれる絵であるようだ。この絵に関して、「ユニークな」「独創的な」「個性的な」の3項目の得点を見てみると、他専修の学生はいずれも2.5点未満の回答をしている（図11・12参照）。これまでの調査により、美術専修の学生は落ち着きがあり深みのある表現を好み、教員は安定感のある素直な表現を好むことが示唆されたが、今回の調査で他専修の学生は理解しやすくオリジナリティのある表現を好むことがわかった。絵画番号4は色使い等のユニークな表現と、「木」としてのわかりやすい堂々とした表現が両立しているためどの群からも高評価を受けていると考えられる。

4. まとめ

本稿では、評価の指針を考える手がかりとして学生や教員の評価観点を明らかにすることを目的に、図工教育を専攻していない学生（他専修の学生）を対象として行った児童画の印象評価調査の結果を分析するとともに、美術を専攻している学生や現職の教員を対象とした調査の結果との比較を行った。

はじめに、他専修の学生を対象とした調査結果について「鈍い」「曖昧な」を除く21項目を用いて因子分析を行い、「朗らかさ」「総合評価」「乱雑さ」「オリジナリティ」「力強さ」の5因子を抽出した。「オリジナリティ」は新たに追加した「独創的な」「ユニークな」「個性的な」が1つの因子にまとまったものである。続いて、他群との比較のため項目数を絞って因子分析を行ったところ「朗らかさ」「総合評価」「乱雑さ」の3因子を抽出した。因子数・項目は美術専修の学生と一致しており、学生同士の観点が似たものであることが示唆された。

次に、総合評価をする項目である「好きな」「良い」を対象として回帰分析を行った。どちらの項目を従属変数とした場合でも有意であったのは「わかりやすい」「感情的な」「面白い」「ユニークな」「独創的な」「個性的な」である。因子分析における第四因子「オリジナリティ」に含まれる3項目はいずれも有意であり、予想通り、絵の奇抜さが総合評価に影響を与えている可能性が示された。続けて、回帰分析をした場合についても他群との比較を行うため、説明変数を11項目に減らして分析を行った。その結果、有意であった項目数が美術専修の学生や教員の場合に比べて少なくなっていることがわかった。

更に、回答の平均値から絵画毎にプロフィールを作成し、各群の評価の差をみたところ、おおよそ他専修の学生と美術専修の学生は同様の評価をしているのに対し、学生と教員の間には差がある場合が多くみられた。ただし、美術専修の学生の方が点数のつけ方が極端な傾向にあり、他専修の学生は特に特徴の少ない絵や奇抜な絵に対しては3点前後（「どちらともいえない」）の評価をすることが多いようである。

比較した結果を概観すると、専攻に関わらず学生は似通った評価をする傾向にあり、学生・教員間に評価の仕方の差がみられた。この差は学生が会得していない教育現場での実践知によって生まれると考えられる。これにより、絵の評価の仕方には社会的な立場が大きく作用していると推測される。また、オリジナリティの高い表現がされている作品に対しては学生の方が好意的であり、より美的な表現の面白さを受け入れやすい傾向にあることがわかった。一方、教員は丁寧な塗りがされていたり、画面を大きく使って堂々と表現されていたりする作品を好むようである。これは、このような作品からの方がより子どもの健やかな学びを読み取りやすいためだと予想される。ただ

し、図工という教科の枠組みの中だとしてもあまりにステレオタイプな表現に縛られることで子どもの創造性を損なう可能性は否めない。どのような表現であろうと許容することが望ましいとはいえないが、学生が持つような新奇性の許容もある程度必要ではないだろうか。教員を対象とした図工の授業に関するアンケート調査の結果をみると、自信を持って授業での指導・評価を行うことができると答える教員は決して多くはない（東、2000）。評価をしていくにあたり、今回明らかとなったような評価のバイアスに自覚的になることで、美術を専門とせずとも現状よりも図画工作科の評価に自信を持つことが出来るようになるのではないだろうか。

また、学生・教員間よりも顕著ではないものの、美術専修の学生・他専修の学生間にも評価の仕方の差がみられた。特に、他専修の学生が絵を評価する際に「どちらともいえない」と答える傾向にあることは無視できないだろう。これは、他専修の学生は、美術を専門的に学んでいるわけではないため、持ちうる観点が美術専修の学生よりも少ないことや自身の判断に自信が持てないことが原因だと考えられる。学生が将来教員になった際に絵に関して正当な判断をすることが可能となるよう、宮地ら（1992）によって示されているように学生のうちから評価について考えていくべきであり、大学の授業等で図画工作科における評価についての問題を更に積極的に取り上げていくべきだろう。

今後は、図工・美術教育の指導にあたっている大学教員を対象とした同様の調査の実施を予定している。図工教育に関する熟達者の持つ評価の観点について検討を行うことで、社会的な立場による評価のバイアスの傾向を更に明らかとするとともに、より妥当な評価を探っていきたい。

注

1. 本研究は、科学研究費補助金：基盤研究（A）「教育系大学の図工・美術科教員養成における創造性育成支援プログラムの開発」（課題番号：23243087）の助成を得て進められている。
2. 個人情報保護のため、図1・4の一部を修正した。

引用文献

- 東紀美子「現代の小学校教育における美術教育の問題点：図画工作科の評価 2」教育諸学研究論文集 14 2000 41-47
- 新井哲夫「久保貞次郎の児童画評価—久保貞次郎の美術教育論（5）」群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編39 2004 81-113
- 有原穂波、萩生田伸子、小澤基弘「児童の描画に対する評価の観点についての研究Ⅰ：教員養成系大学美術専修学生による評価の分析」埼玉大学紀要（教育学部）教育科学 63（1）2014 31-46
- 有原穂波、萩生田伸子、小澤基弘「児童の描画に対する評価の観点についての研究Ⅱ：教員による評価の分析」埼玉大学紀要（教育学部）63（2）号 2014 掲載準備中
- 岩下豊彦「SD法によるイメージの測定」川島書店 1983 12-13
- 大山正「色調調和か配色効果か—心理学の立場から」日本色彩学会 25（4）2001 283-287
- 神作純子「色彩感情の分析的研究—2色配合の場合—」心理学研究 34（1）1963 1-12
- 長瀬容江、原口雅浩「絵画印象の研究における形容詞対尺度構成の検討」久留米大学心理学研究 12 2013 81-90
- 長瀬容江、原口雅浩「絵画印象の研究における形容詞対尺度構成の検討Ⅱ」久留米大学心理学研究 13 2014 45-53
- 福田隆眞、福本謹一、茂木一司「美術科教育の基礎知識」建帛社 2010 190-198
- 三澤一実、増田毅、麻生敬子、田中俊一、宮島瑞子「所沢市における小学校教員の図画工作科指導意識—

図画工作・美術の所沢学力保障カリキュラム作成のためのアンケートから一」文教大学教育学部紀要
40 2006 81-93

宮地功、岸誠一、梶浦文夫、疋田光伯「AHPによる児童画の評価についての定量的分析」日本情報学会
学会誌 8 (2) 1992 3-17

文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作編」日本文教出版 2010 1-19

八桁健、小澤基弘「小学校の朝活動における描画（スケッチ）が創造性育成に及ぼす効果についての研究
Iーさいたま市大久保小学校における描画活動の取り組みから一」大学美術教育学会 45 2013
407-414

八桁健、小澤基弘「小学校の朝活動における描画が創造性育成に及ぼす効果についての研究IIー児童への
アンケートに基づく活動効果の検討一」美術教育学研究 46 2014 277-284

付録

他専修の学生・美術専修の学生・教員それぞれの回答の平均値から、絵画毎にプロフィールを作成した。
図中にある四角囲みの番号は、図1の絵画番号に対応している。

(2014年9月30日提出)

(2014年10月10日受理)

